



鬼舟句選

上



道よりより好む又翁ありは色より先
申やうに記よりむ動きより躍り
暗りまなき記を流しふたれありおのむ
ありく夏のうき橋足さしらすむす
あふらふとあし世をあらはしむす
ねまうらうとあし鬼あるうらうた
玉の巻はげなきことある句ありて



早稲田大学
文学部図書

雲英末雄
53-7521

人のこころにあらねるやれもさむしり。若
 しくもめく見きてはけりるの謝えり
 にとと侍り七車とふふ家の集いせり
 ちりさぬいり一節やあはれさきも
 けいしてあま秘く鬼つゝのれみなるを
 自らもえきし学ひもせりわらば蓮花よ
 このたぬを東西よ左右一延室のり亭保よ
 らるは乃道の盛世なりとてさきよ

あのみよゆへ人のこころの花のよきよ
 足りぬの月の影とさしてさきの幸
 大あしんくし志の思ふもあしり自笑り
 とよまをこれな片しとあはれさき
 あしり

明和五年春二月不取片を紙



鬼母具句選卷之一

不夜菴太祇考訂

春之部

大且むうー吹尔ー松乃風
ほんのりー不のやえ日たよりふり

老松町

糸わ布のすまハ来よりり具足餅
中極や梅よま〜りる去年の空
五筈のきやま〜りりの餅棧嫌
何たも十八八乃 親 持て

雪よく千のたえれ一年乃花

試筆 人麿北雪像おむらひて

旋四句

烏帽子の表のくくと

何の花をもとと一此花

六日八日巾よ七日乃あつな哉

甘茶柳の杉ふ多きまゝにさけあや

凡吹梅の法をみは志つこのアと

初まゝ詠

雪の梅の小枝より薫をーく

山里や井戸乃をいある梅の花

梅散て我をよりのちハ天王寺

右智小鼻毛も後ぬ梅乃花

雪のや梅よとまるハむらーか

うくむすの崎けハ何やらたろー

新の雪 窓の雪 園北雪

枝北雪 谷北雪

うくむすハ山ふとくきふをろり形ア

旅行

あふふふとくぬのや水乃まき
まのあふふとくぬのや水乃まき
くち晴て障子と白くまき日影
曙やまきの葉末乃まき花
まきと葉や月よまて白くまき
日南も尻のまきぬ猫乃まき

空道和尚いふ形るの是かんちり
桃眼とこりれふ即答

庭ふふ白く咲くみる花の形
あふふとくぬのや水乃まき

夕暮り塚みて

この塚ハ柳なくともはらきたり
懶ハおふろ鳥のぬさめ哉
ゆくーすのあてくしまや花子の声
まよまら雲花あり花はき下る

二月二日系る後と後

七つめで

小へおまきハ東へ出まきハ花井ちん
誰の家の子も油むすまの草

骸骨をとりて那山をとり

いつる名残子

ふよりちや笠ぬくほのまき
まの目や夜尔雀の砂あひく

ひより舟りて伏えを

くさる板

おろろく灯え表や淀乃橋

月なくて昼ハ夜むや昆陽の池

ふよりふて

ふ吹ハ暖うて蛙きあ乃底

佛子

おさき北日永もや十五
何まよふひるんの入日人ふ
人乃親の鳥遊りり雀乃子
人子適け人ふ烈るや雀の子
ちを里の麦や菜種や粒のまみ

るいれや焼くさうり返る。唇
状んまきハ印戸を降りりまき北西

里家まき日

猫乃目のまき、昼るぬまき日、の形
あゝまきの柳の糸やあり乃流
樹乃巾子只まき柳の尾長き

伝書よて

みとかり立たし一の姫ねめてささよ

月ヨ尋らつまにわられ一悼

まき此夜の花臭や目、腫れ

二月まき（惟我よと）はれて

のち饑ふ

いさよよの花のまきまきや止れぬ
まきまきの姿持さる 裾 飛びあ
まきまき、口もかきとけに袖さる

伊丹伝書

妹の女や傳あゝひの水乃汁
かゝ井戸へ飛んそこまき一桂の形

一 湫や朽たよりの草すれま
ま風や三保の松原清又寺

四日晴

浪の底子我は形の者やん
永き日と枯ひきより大津る
一の洲へ都のちあゝ馬刀より小
桃の本へ雀吐おす 鬼 瓦
朝うゝ尔去年の蚊うこく桃の花
杖つりし人も立ちかり利木子乃花

黄檗山よて

あかりのみ乃あかりとハ利木子の花きり

三月十日をて銭公母懐旧

支考萬句無行子

かけまゝの愛を焼形か風の音
それハ又ききききききききききききき
富士ハ雪をきき花一時のより乃山
ふあての花てより飛て餘をハ松
恥しの老子守の法く花又のハ

何くれと浮世をぬすむ花乃陰

煩悩あれハなせあり

骸骨のうを粧て 花乃の那

摺汗の花尔娘ぬ 菴かな

花乃に何うのきて けうはく

鐵卯懷旧

うそやな様をえれハ咲うかり

花乃以扇さいぬり 法藏人

兵部大浦光成のもとより

文の中尔様の花を入れて

送るれー返りー

九字の状より 花乃 こなきり

去年も咲きしを 咲や様の本

さく々咲以る是二本 馬口本

旧よりし牛者 野尔寐て山さく

谷水や石もあよむ 山さ九歌

け句長作老人より

桃浩翁傳受の時此吟

ちうよう人尸を一ふ

思谷よて

盛ちる花も 弱ぬ 急佛うあ

師才のむきひせまふしく

いりれー人よ

花のちい本よりよる人そあめたう祿

大心禅師六十加文

順ふやまきたまひつ花を耳乃奥
うつ後ふや陽乃花耳陰乃花

又もまふん花尔ちうまてうつしく

定家つの後中よ抱とめ

たまひいとたんきまきく

親世音のたせぬまふ

法寺尔行て

花そあふ散ハや後を抱く飛せ

花散て又志所のたかり園城寺

多田院花ん

武士と見えたる散き花の風

咲くはにふらふら花のちりかきり

散花

又ひとつ花をつきゆく命のな

まよふ花はちりしも 花まはき

那田村に蜩あへきり殿の頃

孝行

目を横尔白鼻ハ堅立ちりまの花

とちりまも末志やよ又ねるれ

系子位うくゆかりて古はを

まぢれりるまのすくなふ

むまて中いてりる

まゐの降もおもふ おもハねふ

涙は晦のるを

まゐるりふかきりて降ふけり

雑

淀川にすくまふやろ車

初瀬小旅森して

小坂文て川きききまよくは

雲の板も又おもひ後や水乃軍
埴尻ハ不二のやうなるものなきん

池田唐船劇

むく北海中比の劇今ハ田まら
疇まくをたうて着したる織
女の観乐の歌をおもふて

棹のふハ木の声のみ湫つみ
羨ルかて人子ハアそに白薙
松風や口十るてもさハうい

东山院御葬袴を物みなまで

汚車ハ雲の月板のなく喜哉

鬼貫句選卷之二

不夜菴太祇考訂

夏之部

まゝとるゝ粗雑波より船尔
のかりておのの定のりりり
るけるふと

淀舟や夏の今来るふのつ
まゝとるゝまゝのりり更衣
一日てゝ花尔久一き 袷の
まゝれるもの居の祢らひ

ありて為方ちよはれり
とさふまうせつういしふとて
う月三回りのちふ行て

我ハまゝ、浮世をぬりてころも
意のたふちよも姫一や、衣の
花惜一むけもなるふの柴車
まのぬやうふ人ちよなり時
おち一雲井のちよきす

月とまの耳すり拂ふ峠のち

雲花のちよさむる月とま
津乃石のちよさむる月とま
傘乃ちよさむる月とま

け夏ハいく度まうんちよま
ちよお細よを通りて

空平鳴や久田の底のちよま
江戸にて

あちちむく君もちよ一都
なま一いちちむく君もちよ一都

題呂猛

蚊をよけて穀の斲や時多
板のぼ灯白一 月とくま寸

糸をよけて

神くるとま日歳アてゆら山
非情も毛原子枇杷の恙茶が

みよりの川よ業平乃

隠きたまひふとてあり

ゆる小人の糸匂せよとるみ

けきハ彼男のむろ一杜あ
の例小たひてむろ杜あ
りよえ茶を沓かり小をきて

むろ一とハ郎塔までの茶末のな
卯月廿七西吟へ行て

茶なりとも為吟儀 好とあろる
おちりくゆるさ小

糸の目とさ我五月ぬお七い出ん
橘りて木のく發匂せ時

あそぶるを味てたち花の起ててせ

旅の里

のり愈や橋小りよ 塚乃内

んちうてまらるもおろし系引草

はくくとおも

赤むろし踏つかりる 蛇牛哉

我の才の細うたかりや牡丹畑

はる飽蚊もちかくさせを居

猫位うつまおくれ悼

ね七さそふゆや寸ひとハ偽と

海音味系北よりこひ小登句

ときて

せをちつん車り飛元なる

卯月廿七日道中とりし医師

乃新宅小て不句をれ

け新小あやめ草くん 来 月 者

端午

葦系やや乃粽の國津風

意ちしぬ女の粽 不形な

人此旅暮小て

翌一き雨を舞てつ 花あやめ
螢又や松子故帳つ 昆陽乃池
菽垣や卒都婆乃あいを飛ほし
形のすゝやかき畑をいつる 月
さつきあふふふふふと覚へちや
五月あふりさなうう渡る 二王あ
ささくれや館のおとこをたぬく

西吟集行

侘ぬましと毛虫ハ落ぬ 彦 式
竹のこやを隈小すて 山差家の坊
やき壺尔たしる 細く咲小け

鶉飼

鶉とくともうこ 鶉ををくま
根まよの水子花置く池のうへ
大坂へ行て 東約真切
まの花乃ち小満のせて 根をひく

夕暮ハ館の夜見る川流のな
こや川町尔あそびて

飛館の底リ雲ちく流の荀
蟻の巢ハあつふよのなり夜木立

学うの教たくりせハ目白分

といふを今あは

学や音を入れて只まゐる

休斗彩宅

夏菊尔家をう川も家居分

探題蟬

鳴蟬のその木もとき居つらぬ歎

鳴セハ一鳥とかりるせこ乃教

かくちや竹尔蟬なく相國寺

己ま小忍ふくゑせて

夏草の根も葉もとちよふがかと

京よりいふかへり

水や月や風もふれりふる里へ

さかくと蓮うこゝの池乃亀

小町の袴のくさくさ家
すく風ちあちちむきたるみくれ髪
夏の目乃うらんで氷の底ふさふ

松雨真行

あてー子よは原小足のはけるまで

田家

六月や白を母ふそつま白哉

知牛老母死を悼

水雪月の汗を融くほとけ

雲の冴たん不嵐乃器してと
夕立のまよやいつく下弦をうん
夕立や隣在雨ハ 風ふいて
夏まよ小舟を母めうれて旅の空

夕涼

かんとけすの暑さいと石の塵を吹

旅行

夏の目をとろとろと 瀬田の水の色

獅子谷

涼風や虚をうみちて木の敷

旅行

あの心もけさのあつさの紅傍哉

紅の涼

日盛を花とみ〜明日も来ん

夏乃夏の顔たろ〜もそるる

水月月の以舎羅の

刺殺友しけるを

國を秋うたろ〜又ふまハせ

去々ぬ人と遙問答 すみ哉

冬去又夏のは〜志やといひより

雑

志よ後くと岩を流る大井川

須戸ふはあつまかけや〜不衣

山崎ふて

木神せ 油志免木の書えり

鬼貫句選卷之三

秋之部

初秋

不夜菴太祇考訂

かんで秋乃来いとも見え次ん
我よりともせいて秋きりこころいの
ひくくと木の葉うこれて秋とつ
ん略起て秋きり風乃音
け家を侍て麻小我や起しそや

初秋雨

初秋のときやあやむ北窓
あふれけしやうほめく秋の秋の風
初も秋の中へも秋乃暑さ哉
桐の葉も落ちても下る廣うれや

下り舟ふて

船は下りや淀のとき三太の水車
人乃寝乃くるとはかりやふよつて
こゝろふて顔もむらや玉はつり
まほろろはけてこりさし萩のあ

庭の萩

内並ぶ月とくしくぬく萩乃あ

高井立志餞別

人むらふて笑ふわめれてうら
かくと百三十里とやらと百廿里

我らへふらハこちう一吹ハ萩乃風

かき夕はそと子橋のほ
とかり也あふハ萩の松風流水
平ひうてあをひやうる後

りき形経乃虫世も世分
尔吹送アてねのれくの教
かすりなり今も雲たれを
やうて月のよめふはくのく
まゝて

雲かり乃松の本さくも秋の風
むよハ堂湾の影地家建
かろひ舟きお小堀江の川あじ
尔吾梅の浪をりきまき入目を

惜む帰帆半ハ屋上ふえに
て姿あらしぬ旅人乃のうれを
おもふふけ夕ハさくもつたじ

魚ノの秋乃風れあらし帆遮り
野徑り遊子

秋風乃吹けりけア人此處
秋よのさりの里を通アて
ぬむよやん空遠りそに尔草の高
宵きいつも秋子うつまをむしの教

けり方の推しこけなきむし此こゑ
飛をふれや風平吹くも虫此ふゑ

獨聞虫

人呼ぶるも夜又つむし此声

古小ハ武庫候所のつきまをく

聳へてたハ伊約うつま此まを

るのふさし來ねる人たけれハ

物切む雲もなくうち晴て致

景志とくを的歴たり

とせるかきお方のないるり流も外

有国此むじをあをれおほへて

古棟や茨く後なるまかりくす

おもしるさ急ふハアそぬたれり那

おの玉心く川持きるる侍そや

茫くと取みさしるすまきあか

吹りしる侍乃おの此まは勢よ

け侍窓より吹や秋乃風

かうんよよ雨の後乃女衣花

今きむらりの秋もたうて

伏見より町屋乃いふ鳴鶴

伊丹あそこ大

あそこ大子猫つ戸光るとひやし

芭蕉ふもおもハせふりのうこん哉

思ひ余りて鳥の名を打礎の形

朝寝のけしの目たやまの教

来山の老母の死をみて返る句

おもひやる只の秋さくくさされぬ

老母のさまよりける歌

あよの秋よりいつ迄もそ観ふまで

富士の形を画るふいさうか

ももことなすれとも徳を帯

当る雲の今見え小をやりハカ

其けしきもやうくおぬしの

らぬいで彩なる富士をえる

と暫時よりいくをや我やあし

さふ山はたのれひとり立あハ

並ひたゞのらん外山の必り
名あるははまきと古今景さ
のかくくぬち我あまき

によらりりと秋乃やたら富士北山
夕くればまき

馬をわけと今秋の富士えり秋語哉
う声とりまもあつて厚の声
丁子の花をかくむし鳥
むしりう穴もあまよ秋乃空

来山の妻乃遊悼

萩の葉そよくちよ(さよ)文る
砧ねちふさー入月のけつれて
けり丁子の人の妻北極神の言
うはちの夜とハ秋とハ今我嘆
踏てハ花をちありぬまはして
きちくたか

飛の花や月ねくめ(電)なうよろ
老母をいさなむて

風をたき秋のひるしの孫帽子

旅泊

衣う川京へハを起森 登る形
犬つきて穠足ルおきハおの正

家せまておちのぬ道々

さへ壺下なくそこく平柳

かこつてせて昼のこ流すてハ

陋ーやくくほこりたき枝

て安んぢり

吹風や穠のきよ月あ貝足枝

待宵

あまみちてぬ日のける月たけふはな
秋ハもの月板鳥をいつとも鳴く

名月十九句

月よけまき去年乃今や花枝咲
除ーと我新さへや窓乃月
月をとて漸く雲乃ちきれく
形とふと昼うとそ首たふかくこ枝

木とよもて世界皆花月の夜

連交

えり月といひたれぬ月の今宵哉

病後

志みくとして見えけり乃月

叔父の病後

名月や夏戸を明てとんとてお教

文のや花ハ紙下も押さの哉

け秋を孫子子のたの月見え哉

悪疾くと獨り文る月見えハ

明赤ハの侍客々々窓乃月

月ハは今宵子明て何ひとつ

父の身まかりける忌中乃

名月

虫と鳴月も文きり忌の中

名月くてもりきハ

たまはは月とを詠めお

良夜大夏

去よかく小降たき月をくとも

十五夜あやかりけきハ

何乃木と足てあふふ今宵哉
とこ文る空のあてともあめの月
燈火やおのきこめながらあは月

歌人の居たう入夜き

秋は月人の玉まで光りけり
富士の山ちいさくもなき月し哉
えぬあれと月の為小ハ糸乃濱

中秋十七日女の方まろり

あがる哉

あくあろりき世の月ときの子哉

迷懐

沼とてハせうくかし出し漁六の月
月代やむろのを起きはは浦
振の本乃寸人と立きる月夜哉

花女の待尔際す

よの方をおもてかろ我圍の月

神の浦とよ孟子

うけたりや足赤の月乃袖ふく

後名月

名月や鏡の雲を山の端

後の月子まめなとよと

夏を喰て豆の花とて詠をや

後名月

けつ梢の松風とくれぬさ

記より東山の夢をまよき

く冥非情さくとも

比さりて十五夜の姿も々

宵の空小晴て月明くさり

初月夜の陰時けふ乃月

十五夜も姿かりける十三

夜もふりけきハ

又の月もあまのいてこけ甲斐なハれ

真言子の秋長月十七日

の夜文行すく小庭のけし

才人ハあつす

今乃心是こ昔秋の秋乃月

おちりおねのきぬふとふ

ちくちくこをめぐりて

いと鳴猫の電子ねむるの形

破芭蕉やふれぬ時をを越す

宗因墓

宗因ハま死なれり秋乃塚

久のよや朝のぬるうや此葉

辛陽

葉の香のひとりをのこは白ひが

云存危は真月決袖舎

よもろし子乃存哉あ拂

旅泊病

たのねねを疝まひ祢アて旅よが

落植松ひ鶴の糞を換ふけア

古寺やあまをいぢりも椽の下

志ろくひ子葉の弁ハ奈る地町

文臺記

みむろ山の嵐ハ立田川乃
流ル古ち子所山の石茶ハ
今に系氏鶏賀の家耳
たうれよりて世に名を
照以寸法也

高サ 三寸を安

竝 七尺八寸

横 七尺九寸

裏小ハ

別所山満形寺の悟寺住
之村興昌寄進之

と朱を以てかゝり前繪ハ
むろの秋底子句ひて夕小
月をおもひ形小奥山の姿
をたゞお実月日とてあふ
流きてちゝぬ新さへ眼小沉
み及てちゝるをおもひ

いくちを免のん乃ん此種とあ
アけんそと知ぬえ此紫の
救さくすし流小意一くこ我
傳身しよと一室永ひのよの
冬の秋の紫の花むさく小窓
のちとちり筆を置ぬ

むさくしよの底りえつて花み紫

寄謡々常

目をさすせ後ちぬ世乃み紫種

あゝ若らまほひとり芽庇のあを白小して
まよの紫の岩小とをあをを母まう形
木小を似寸板をちいさき板の突哉
去程りうちひきまきる川田のな

賀

云此紫の落穂拾ふをこのみう那

九月三

むさくしよ今やうは秋のくき

雑

来いとりの時りハこいてをふいおひ

意

君とさ我ををとこをけあへ

契ふ逢意

油さーあさーさーはー寐ぬねか

鬼貫句選卷之四

冬之部

不夜菴太祇考訂

あーの年冬の日はさ乃寒まか

夕陽や流石年寒ー小六月

大坂へ送て

はめいふつけてもやー京の山

福島の住居のー

冬とまー松の木指てむらひか

はるくーとものさーやる火焼か

すく果木のけみちかろく 小まふ
ふんと栗のうちくきまぢ枯てふ小
おすこやあたり海や阪を花

世の中をすてふくと換させて

あともうひろふ坊ともう那

古寺に波むく櫻桐の寒けや

左郷

寝かすむ朝や夕つる夕の南
麦蔚や妹の湯をまつ頬のうり

葉ハ散てぬく雀の木の枝小

宇治うて

冬枯や平等院乃庭の面
枯芦や難波入江のさくお波

久しや交りける友の身は

あかりけるときこへ侍りあれハ

いよさく旅の補差ハ物うきを

木のうしのさきも似ぬおのおもひ
ひうくと風をやかく冬牡丹

茶の花や十も小よう似る物日山
皆人の匂ひハハハ枇杷乃花
川越て赤まは之ち色 枯 柳
孝やや夜子の物せける峯の松
白柏子の尻小ちかりて久しく
すみける産小立よりて

引のへて白い毛子ならはを此花
甘えるものときハハハハハ神送
時ぬてしやトみーのー天王寺

おとたり交附ぬをきくやう形山

形もものきし為茶すくおまは
冥をくくとして不夜城り入は
花あかりて姿まきのいふハハ
ーなまて白ひはかり声ハこける
とよたくひたして正あま杉
ぬーのぬむやを我不ちて
又りりワきをせむ

系り只あめのこほろ 志くれの形

初々きぬわふくしをも鳴千鳥
子多鳴頂六の鳴石の井ふりき
又汲わ子多のこいて改る海士
家鴨のとおもふ人なり沖の鴨
は後三毛領りて

遠下浮沖ハきく浪鴨乃教
多多のおもくアて浮りきり
おもふり花のいより其さち
淵み村多の声きく板毎と

瀬下園さきなふやあアらん
あゝるお世のこ海あつと
都ふりきてまゝる女と
まゝぬオウのれさ！をや
時うつり一せむなりて月
こ日七十小満るおあは小
鐵卵去て来ぬは何者我さ
は何者空寂又又それ
の巾子扱ーミルひあれて

きのふはつとよおはさかりー
をとおもふもふとせし又何ぞ

我や

いつもえるものとは遠く冬乃月
宵月の雲ふかれちを寒さらぬ

旅泊

篠のうらけめとい木若北森見え

夜話

灯火のえ葉を暖すさむさか

待宵の从中や耳とあけてかゝ
紙子送てるぬ布古の何とさす

銭子

盤谷ハハのこちアアて女ッえはア

樹のひて冬のやかく傍やよふはふり

山家集

えつやや積ふふすはる煙も類

初雪ふなとまのきはしけ。

我々の雪のくして穂えふこされ

白妙のここのやちらゝを乃空
を後外廿初り狸。おノ我へて

十二月二日袖書

このちの降ふくと師をよて
富士のち我地の必の者なるの
空若

空の降お握。まにあつと炭固外
ちて富士お富士ちてちらぬしのち
ちらら人の中むつきー

今ハ空ちもたかくてこのめ

ちる終て

ちり終たひるぬりてふむり外

おさちまき子におくれ一人の

もとへ悼て中つらけり

ちとこのちちるき世乃花ひな

念後の書を

飯くふて其の後書を乃降るけり
ぬくち経飯のやうなるものな

みよりのと氷の月をうるみりり
井のもしのまきおもき氷柱哉
何ちへり長きうりる氷柱哉や
物日のけさすや氷柱乃くろ車
寐て冷て空也まきこしてまへせぬ
殊勝也牛乃糞ふむ陣くま
くまのよて家老なる陣 扣
陣扣 古くともたうに空也よ
節季ひや白こり来てるのぬける

世の花や餅の盛りの人北野

歳暮

惜めると寐く起くまてある
月花をえのまや年の峠より
花をわそまをそして花道を結
境を磨ふままの老のよさなり
灯の花よりまま川唐の形
欄や髪乃扇より年あく日
惜まなぬ登のつやみとかな年を

君を月を牛のねるこーままのね
寐よきねよ夏のちく傍の年をま
流きての底さへ白か年のね

雑

獨居の偈の唐糸約て

燃る火尔灰うちきせて急仏哉
人百千急た急なところい物をなし

